

---

# 脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

てのひら日記

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

脂身と異世界にいるんだけど質問ある?

### 【著者名】

Z2456X

### 【作者名】 てのひり口配

### 【あらすじ】

一般学生と脂身（変態）が不思議な鏡を見つけ異世界に飛ばされる話です。

変態×ギャグ×チート＝？？

この小説は脂身成分を多く含みます、アレルギーなどに注意してください

異世界学園ものです まさに脂身小説です  
初投稿です 小説書くもの初めてです  
お手柔らかにお願いします

## 主要登場人物・能力説明

わからなくなったら読んでね

隨時更新

主人公 : 市原 隼人

容姿 : そこそこ良い

身長 : 171cm

### ステータス

種族 : 人間

潜在能力

体力 : C -

筋力 : D

知力 : B

魔力 : S

精神力 : SS

敏捷度 : C

器用度 : A

## ギフト説明

ギフト1：魔力増加（大）

効果 : 「魔力が大幅に上昇」

発動条件：常時発動

ギフト2：異空間収納

効果 : 「異空間に物を収納」（生物は収納できない）

発動条件：対象物を触れる、念じる（自分が持てる重量の物しか収納できない）

ギフト3：武器重量感無効

効果 : 「武器の重量感が無くなる」（重量は変わらないので威力はそのまま）

発動条件：武器に触れる

副主人公	：小椋 浩太（脂身）
容姿	：そこそこ良い（脂身）
身長	：178cm（脂身）
主人公との関係	：中学の入学式からの友人（脂身）
ステータス	
種族	：人間（脂身）
潜在能力	
体力	：B
筋力	：C+
知力	：F-
魔力	：D+
精神力	：C
敏捷度	：B
器用度	：D

## ギフト説明

### ギフト1：超回復

効果 : 「体の異常を高速で治す」

発動条件：ダメージを受ける

### ギフト2：魔力感知

効果 : 「魔力を感知する」

発動条件：常時発動

### ギフト3：状態異常無効

効果 : 「状態異常にからなくなる」

発動条件：常時発動

主人公の友人：ダリル＝コーダ

主人公との関係：主人公が異世界に来た口に出会い友人になった

### ステータス

種族：獣人（狼）

潜在能力

体力：A

筋力：S+

知力：D

魔力：F

精神力：C

敏捷度：A+

器用度：C

### ギフト説明

ギフト1：筋力増加（大）

容姿：？？？

身長：200cm

効果 : 「筋力が大幅に上昇」

発動条件 : 常時発動

## 一話目 僕と脂身と

脂身と異世界にいるなんだけば質問ある?

俺（市原 隼人）には中学のころからの付き合いの脂身（小椋 浩太）がいる、なぜ脂身と呼んだかといつと、昔友達同士で焼き肉を食べに行つた時、肉に例えるなら誰が何といつ話になり俺が

隼人 「お前は脂身だろ？？」

小椋 「脂身!? 何それどうこうことー?」

友 「あーわかる、脂身の部分つてはじめ食つてると美味しいんだけど後から吐きそうになるんだよな」

隼人 「そりそり、はじめ話てみると面白いんだけどさ、テンション高いまま話続けるからウザクなつてくるんだよねコイツ」

小椋 「あ、それ母ちゃんにも似たよつないといわれた」

友 「母親に言われるつてどんだけだよ、つか家でもテンション高いのかよー」

小椋 「いやー生まれながらのスッパスターの俺は誰にも止められないゾエ」

こういう奴である、背が高く（178cm 俺は171cm）、容貌そこそこ良く、エロイ、そのため学校内では男女共に人気があるのだがなぜか俺に懐いてきて中学一年の入学式にちょっと話しか

けられてから、一ヶ月ほどで市原＆小椋みたいな認識になつてゐる、一度俺のどこを気にいつたのか聞いてみたところ

小椋 「俺、お前がいるとすっげー落ち着いてテンションあげられるんだ！」

隼人 「気持ち悪つ（落ち着いてテンション上げる……？）意味がわからねえ……」

こんな感じで中学1年から高校1年の夏休み、現在までの付き合いである

小椋 「いっちはーらーくーん、あーそびーましょー」

ガチャ！ カラカラカラ（窓を開ける音）

隼人 「お前……毎回それで呼ぶのやめろや！ 携帯なりなんなりあんただろが！ セめてインターホン使え！」

小椋 「いやあん、私つたら、お・ちや・め・さ・ん」

隼人 「はあ……まあいいわ……お前どうせ次も鳴らさないだろうしなヴァカガ！」

小椋 「いーじやん、別にむしろ3年間続けたのにいまさら変えたくないもん」

隼人 「何、今度は何に影響されたんだよ、言葉遣いがキモイぞ」

小棕 「なんかクラスの女子にお前が喜ぶつてメールで言われて試してみた」

隼人 「ま・た・か！お前・・女が好きなのになんで俺たちのホモ疑惑に自分から乗つちゃつてんの！？」

小棕 「俺・・・お前ならイケそうな気がする～」

隼人 「・・・・・・・」

カラカラカラ ガチャ！ （窓を閉める音）

小棕 「ちよっ、いつもの冗談じやん！マジ今日暑いんだって！俺んちクーラ壊れて避難しにきたんだゾ！」

窓 「・・・・・・・」

小棕 「・・・・あん！ハヤトオー！俺を捨てないでくれえー！俺お前がいないと輝けないと！好きなんだよおおお！」

隼人 「オルアー！（蹴り）」

小棕 「グッハ！？ いつのまに後ろに！？」

隼人 「いつのまにじやねえよ、普通に玄関からだよ」

小棕 「腰に蹴りなんてひどいじやないか、腰は男の魂ですよ？ 猛るソウルが突き動かす動力部分なんだゾ」

隼人 「はいはい、一回も使ったことねえ動力部分なんていらね

えだろ」

小棕 「いえ！試運転で使つてます！」

隼人 「マジうぜえ・・・いいから早く入つてくれ、近所迷惑す  
ぎる」

小棕 「いつものことだから大丈夫じゃね？あ、さつきそここの隣  
のオバちゃんがヨモギ餅くれたから食べようぜ！」

隼人 「は？なんでお前が俺ん家の隣のオバちゃんにヨモギ餅も  
らつてんだ？」

小棕 「なんか、いつも元氣でいいねえ、これどうぞ、って言つ  
てくれた」

隼人 「もう完全に定着してんじゃねえか・・・もういいから入  
れ、なんか怖いわ」

from：隼人の部屋 時間 11：40分

小棕 「相変わらず綺麗にしてんなー・・・なんかこう・・・普  
口レスやりたくなるよなー綺麗な和室つて！」

隼人 「一人バツクドロップやつてろ」

小椋 「え、バツクドロップって一人でできる技じゃなくね・・?  
頭打つんですけど」

隼人 「あー昼飯どうする食べに行く?」

小椋 「お金ないから家からカツラーメン2個もつてきたぞう  
作つてー(あれ?流すの?)」

隼人 「お、サンキュー何もつてきたん?見せてみ

小椋 「はい」

隼人 「ふつざけんな!なんで生麺タイプのめんどくせーやつな  
んだよ!」

小椋 「生麺タイプって買つたはいいけど自分で作る氣起こらな

くて残るよね

隼人 「わざとかよーッチ・・・しゃあねえから作つてくれるわ

from：隼人の部屋 12時00分

隼人 「作つてきたぞー・・・つて何ゲームしながら俺の菓子勝手に食つてんだ！」

小椋 「え？ だつて遅いんだもん隼人の部屋はお菓子常備してるからいいわあー」

隼人 「遅いだもんじゃねえよ、お前が生麵タイプなんて持つてくるからどうが！」

小椋 「まあまあ、麵のびちゃうし早く食べて、モン ターハンターしようぜ」

隼人 「こぼすなよ？ 置はふき取るのめんどいんだからな」

小椋 「・・・フリ？」

隼人 「このポータブルぶつ壊すぞ」

小椋 「じょ、冗談じやん（目がマジだった）」

## 一話四 紫色の鏡

from：隼人の部屋 時間17：00分

小棕 「あーすまん<sup>2</sup>死した、あとアロペ<sup>1</sup>」

隼人 「お前それ何回目だよー土下座してろ」

今日もいつものように俺の部屋でダベってゲームする夏休みの一般風景そこへ

小棕 「やういえばさあ、近々なんでもかんでも鑑〇団が来るのしつてる?」

隼人 「ん? ああ知ってる、学校の近くのホールでやるらしいなそれで?」

小棕 「俺の家にボロい蔵あるじゃん? そこによさげなのあつたら出ようかなとおもつて」

隼人 「お前ん家の蔵は確かに古いかう良いのあるかもしけんな、でもお前近づくと爺がうるさいって言つてなかつたか?」

小棕 「見つからなければ、どうとこうじはない!」

隼人 「あーはいはい、それ以前にあれ、鍵かかってなかつたか? 前に見たとき『口<sup>3</sup>いの付いてたぞ』

小棕 「あの蔵つて側面に窓があるんだよあそこからはしごで入る」

隼人 「そういえばあつたなあ・・・はじ」で入るのは良いけど、ちゃんと戻れるのか？」

小椋 「二人で蔵の物を台にして肩車すればいけるんじゃね?ダメなら考えるつてことで」

隼人 「・・・ちょっとまで、肩車つて2人いないとできないよな?」

小椋 「MeとYouがいるじゃないかYO」

隼人 「馬鹿か、俺が行くわけ無えだろ」

小椋 「手伝つてYO! テレビに出たいんだYO!」

隼人 「そつちが本命か・・・普通に爺に頼めば良いんじゃねえのか?」

小椋 「俺が爺に言って許してくれるわけないだろ!...飾つてある木でさえ近づけさせてもらえないんだぞ!...」

隼人 「お前が爺の大切にしてる盆栽を手入れと称して丸坊主にしてからだっけか?」

小椋 「というわけで手伝つてください晩飯に焼肉奢るので」

隼人 「何時いくんだ？」

小棕 「今日、焼肉食つてから行こうぜ」

隼人 「まじで唐突だな・・・」

小棕 「家族全員が温泉旅行にいってる今しかないんだよおーん  
で隼人ん家に隠させて」

隼人 「お前・・・家族全員が温泉旅行に行つてのに何でお前  
はここにいる？」

小棕 「俺がいたら・・・癒されないから・・・だつて・・・」

隼人 「焼肉・・・食いにいくか・・・お前の奢りだけど」

小棕 「うん・・・」

脂身・・・マジで家族にもウザがられてるのかよ・・・

from: 焼肉の帰り道

小棕 「つう・・・食いすぎた・・・ヤバイヨヤバイヨマジヤバイ」

隼人 「お前なんでラストオーダでいつも注文しまくるんだよ、  
そつなるの当たり前だろ？」

小棕 「だつてで頼まないと損な気分になるんだものーっく・・・  
タッパーさえ標準装備していたならっ！」

隼人 「普通にマナー違反だからな、それ、んで、どうするの今日  
はやめとくか？」

小椋 「なにお？」

「こつ・・・・・

隼人 「ボディーががら空きだぜつー」

「ドスツ

小椋 「！？ おええええ「」

隼人 「蔵の話はどうなったんだよ」

小椋 「おぶつおぶつー、ああ、うん、なんか楽になつたから行  
こつー」

隼人 「吐いたからじやね？」

form：爺の蔵：外

小椋 「夏だからこの時間でもわりと明るいなライトいらんかった  
かも」

隼人 「蔵の中は暗いだろ、はじこは？」

小椋 「ここにあるから先にいくわー」

隼人「おーう、いつてこーい」

小椋「いや、来てよー?なんか中割と怖いんだよー。」

俺呼んだの怖いからだな・・・ここにつ

from : 爺の蔵 : 内

隼人「うえーホコリがひでえなあ・・・」

小椋「まあ爺しか入らねえし掃除もしてないんじやね？」

隼人「ああ、んでな、お前に残念なお知らせがある」

小椋「お前がそう言つた時はすげー嫌なことだよな・・大体・・優しく言つてね」

隼人「ホーリで俺たちの足跡が付いてるんだよ、これバレるんじやね?」

隼人「ま、俺は怒られねえから良いや、さつさと探そうぜ」

小椋「そ、そうだな！ 過ぎてしまつたことは忘れよー！ ビーチエー  
▽にでたらバレるんだし・・高値が付けば全部チャラだ！」

隼人「その前にバレたら〇ＵＴだけどな」

なんか、想像してたのより良さげなの無いな、鎧とか刀とか期待しあんだが・・

小椋「お、これなんだ?」

隼人「ん? 鏡か? 中途半端な大きさだなこの鏡」

小椋が見つけたのはサッカーボールほどの円形の鏡だ

小椋「紫色の鏡なんて激レアじゃないか? よつしーこれもつくれずえー!」

お、マジだ、紫色の鏡なんて初めて見るな

隼人「おい、こけるなよ? 鏡だから割れるぞ」

・・・ん?

隼人「小椋・・? 鏡を床に置いてどこいったんだよ・・・あぶねえな」

どうせ驚かそうとしてるんだろうが俺基本そういうのには鈍いから

大丈夫だな脅かすのが脂身だし

隼人「それにしてもこの鏡綺麗だなしかし紫の鏡なんて見難いだ  
ろうになんで作られたんだ？」

・・・なんか・・・眠いな・・・

## 二話目 平原と非日常

from：神殿？：内

硬い・・・体の節々が痛い・・・

小椋「おいつ隼人！隼人！OKIRO！」

隼人「んあ・・・？うわつ！」

バシイン

小椋「アブアツ！？いたつ！痛い！なんで平手！？」

隼人「顔が近いんだよ！起<sub>二</sub>すなら5mは離れろや！」

小椋「5m・・・5mって近いようで遠いよ・・・」

隼人「あー目覚め最悪だ・・・体痛えし・・・」

小椋「あ、隼人！そんなのどうでもいいからーここどこか教えてくれ！」

ついに頭逝ったか・・・？

隼人「はあ？俺の部屋・・・じゃないな・・・なんだここ

確か焼肉食った後で爺の蔵にいって、それから鏡をみつけたら・・・  
ここから記憶が無いな・・・

隼人「蔵……じゃないみたいだな地面石だし、つか周りも石作りじゃねえか」

小棕「とりあえず外に出てみないか？あそこから出れるみたいだし」

小棕が指さしたのは木の扉だ

隼人「誘拐……？いや、無いな、それなら小棕がいるわけねえし」

小棕「なんで！？なんで俺が居たら誘拐じゃないの！？」

隼人「誘拐対象にお前を入れるなんてありえん、脂身だし、お前の家族、絶対身代金なんてお前のために出さないだろ？」

小棕「……ああ……なるほど……つづ！心がつ！痛いつ！」

隼人「痛いのは頭だろう……ほら、せっせと立てとりあえず外に出るぞ」

from：神殿？：外

隼人「なんだこれ……」

木の扉越えて石の階段を上りきった後見えたのは

隼人「平原……？」

ありえない、何がありえないかというと広すぎる、4方向すべて見えなくなるくらいまで平原だこんな場所は日本でありますのか？

小椋「おおーひつれえー！テンションあがつてきたー！」

バキイ

小椋「アフア！？なんでグーパンチ！？」

隼人「痛いか？」

小椋「痛いわ！口から鉄の味がするんですけど！」

隼人「夢じゃないのか・・・？」

小椋「どうしたん？隼人、ていうかマジで痛いんですけど」

隼人「お前はこことこだと思ってるんだ？」

小椋「・・・平原・・・？」

隼人「そうじゃない！高低差のほとんど無いこんなに広い平原日本にはないぞ！？」

小椋「じゃあ外国・・・？」

隼人「日本にいたのにか？」

小椋「・・・あー、ほら、あそこに道あるし行ってみよつぜ、歩いてたらその内人に会えるだろうし聞けば良いじゃん」

from：平原の道 歩き始めて2時間（？）ほど

小椋「……」

おかしい……

隼人「なあ小椋、疲れたか？」

小椋「いや？全然？」

隼人「もう歩き始めて2時間くらいになるよな？なんで疲れないんだ？俺たち」

小椋「それは！鍛え抜かれた俺達の肉体のおかげじゃね！？」

隼人「俺たち万年帰宅部が何とかしてんだ、夢……にしては体に感覚あるしなんなんだ？」

意味がわからん、

小椋「そろいえ、俺さ、蔵で鏡のぞいてたら急にあの場所で立つてたんだよ」

隼人「ん？ ちょっとまで、寝てたんじゃないのか？」

小椋「いや、鏡のぞいてたらあそこにいて、んで、いつの間にか足元で隼人が寝てたんだよ」

隼人「そろいえ、俺も鏡のぞいてたら急に眠くなつて氣

「づいたらあそこだつたな」

てことは、ここにいる原因はあの紫の鏡か……？じゃあここはどこだ・・鏡の中・・・とか

隼人「んなわけねえか・・・」

小椋「あ、そういうえば、爺が俺に蔵に入らないように言ってたのは、鏡がどうとか言ってたような・・・」

隼人「ん？ ちょっとまで、盆栽の件のせいじゃねえのか？」

小椋「いや、たしかあれって中学入ったばっかの頃だつたし、蔵に入るなつて言われてたのは幼稚園の頃だつたな」

隼人「それで？ 入るなつてって言われた理由は？」

小椋「確か鏡に飲まれるとか、別の世界に飛ばされるとか言ってたような・・・」

隼人「・・・やっぱ・・・信じたくないのに信じそуд・・・」

小椋「おお！ だとしたらここは異世界か！ スライムとかドラゴンとかいるのかね！？」

隼人「お前は異世界だとしたらうれしいのか？」

小椋「あたりまえじゃん！ 異世界に召喚されし人間とかめつちやかっこ良いじゃん！ 絶対勇者補正付いてるだろ！？」

隼人「お前……人に会つても、異世界から来たとか、勇者だと  
か言つなよ、頭逝つてると思われるわ」

なんか隣にアホがいるところまで考えるのを放棄したくなつてく  
るな……

小椋「ん？ あれ、馬じやないか？」

小椋が後ろを振り向く

隼人「なんで俺達はあんな遠くにいる馬が見えるんだ……とい  
うかあれば馬車かよ！？ 車じやねえの！？」

外国でも馬車はありえねえぞ！

小椋「おおーい止まつてー止まつてくださいー」

小椋の声が聞こえたのか馬車がゆっくりと減速しながら目の前で止  
まつた、止まつた馬車は屋根の無い荷馬車のようなもので3人の人  
？が乗つていた一人は馬を操つていた30代くらいの男の人、腰に  
は剣、防具はレザー防具というのだろうかRPG定番のような格好  
した人が一人、問題はここからだ、その後ろにはローブに木の杖を  
持つた綺麗な金髪の少女だ、だが……耳が長い……もう一人の  
男？オス？ もはや獣だ、獣人というのかもしれない、斧を持ち、体  
は西洋鎧みたいなものを着ていて側にはヘルムも転がつている

小椋「ひやつほー！ ほら！ 隼人俺の予想あたつただろ！？ ゼつた  
いここスライムとかドラゴンとかいるぜ！？」

隼人「まじか……？」

？？？「あの、大丈夫ですか？」

耳の長いローブの少女が話掛けてきた！？言葉は通じるみたいだ、どうする！

小椋「俺、小椋浩太って言います、ここから近い街ありませんか？道を教えてほしいんですが」

？？？「盗賊とかじやねえみてえだな、丸腰だし、なんで丸腰なんだ？」

獣人？が話掛けってきたとりあえず怪しまれるのはまずい・・・情報がほしい・・・

隼人「えっと僕ら田舎からでてきたんですが、道がわからなくてできれば教えてほしいのですが、武器は、色々あつて荷物ごとなくなってしまいまして・・・」

獣人？「武器と荷物もねえってことは食料や水もなくなしちまったのか・・・ここからフレイヤまでは歩きで2日はかかるぞ」

小椋「うげつ2日かあ・・・」

まずいな・・・腹はいけるとしても水がきつい・・・

？？？「まあ、困ってるみたいだし馬車に乗せてあげたらどうかな、今日はもう暗くなりそうだからここで野宿して明日からつてことだ」

馬を操っていた人間の男の人だ

隼人「おお！ありがとうございます！僕は市原隼人と言います、できれば情報が全然こない田舎にいたもので色々お話を聞かせていただけませんか？」

ウォル「良いよ、僕の名前はウォル＝ティーダ、ウォルって呼んでくれ、んで、そこのローブの人ガフオル＝アリシア隣のゴツいのがダリル＝コータだ」

ダリル「ダリルって呼んでくれ」

フォル「よろしくね、あなたたちもフレイヤ学園の入学試験を受けにきたの？」

隼人＆小椋「「学園？」」

f r i m：平原：夜

その場で話すのもなんだ、ということで野宿の準備をしてから話そうということになり、パンと干し肉をもらい食事にありつけた、食事の後、この世界の事や学園の事の話を色々してもらえた。

まず、この世界には3つの勢力があり、一つは東にある人間の国、リゲン大陸ここは人間の国だ鍊金術が進歩している、そして西にあるのはアリフィア大陸ここはエルフや小人のような種族が暮らしている、そしてそういった種族は総じて魔力が高く魔法技術が進歩している、最後にハルド大陸ここは獣人の国で鍛冶の技術などが進歩している

そして今現在居る場所は3ヶ国の中にある中立の場所フレイ

ヤ学園だ、このフレイヤ学園というのは国があるのでなく3ヶ国で資金と土地を出し合い最も争いが集中しそうな真ん中の土地に3種族が高いレベルで学べる学園を作り三国とも争そわないようを作られたものだ。

フレイヤ学園について、フレイヤ学園は3年制で、排出する人材を高レベルで育てるためかなり合格率は低い、毎年各種族100名づつしか取らず試験を受ける人はその数十倍はいるそうだ、試験内容はペーパーテストや実技テストではなく試験用の水晶に手をかざすだけで潜在能力がわかり、それを元に決めるらしく、落ちた人も潜在能力が低いと次の年からは受験できなくなる、水晶には潜在能力のほかにギフトと呼ばれる能力を見る事ができる、ギフトというのは生まれたときから与えられている能力であり、たとえば獣人などは「体力回復 小→大」エルフなら「魔力増加 小→大」などが一般的で常時展開されているものだ、その中でもたまにレアなギフトや基本的に1つしかないのに2つ3つギフトが付く事があり、そういう1つ受験者は潜在能力が満たされていなくとも優遇されるそうだ

魔物について、今居るこの場所にも魔物いるそうなのだが、ここはフレイヤ平原と言い、肉食系の魔物はあまり遭遇しない、基本的に肉食系の魔物は森や林、などの身を隠す場所でないと現れないそうだ、この3人の目的はダリルとフォルは学園の入学試験を受けに、ウォルさんはそういう1つ受験したフレイヤ学園の入学試験を受ける人たちを送るために、学園が雇つた業者さんらしい

隼人「学園の入学試験はお金とか身分証なんかは、必要なんですか？」

フォル「入学試験にお金は必要ありません、身分証も持つている方はいますがギルドに加入している方が上流階級の方しか明確な身

分証は無いので必要ありませんね、ただ、入学出来た場合の学費は学園生活内で学園に入つてくる依頼をこなした報酬で払うか、卒業後の働きでのお金を返していかなければいけません」

小椋「学費は高いのか？」

フォル「金貨100枚ですね」

その後も色々教えてもらい、お金の単位がわからないので聞いたところ、びっくりされたが教えてもらえた、

小銅貨10枚で銅貨1枚

銅貨100枚で銀貨1枚

銀貨50枚で金貨1枚だそうだ

ちなみにお昼にかかる1食分のお金が銅貨3～4枚

学費たけえ・・・

ダリル「まあ学費はたしかにたけえが学園に入ればそれ以上の収入は取れるようになるからな！問題ねえ」

小椋「おお！隼人試験うけようぜ！俺達が落ちるわけないぜ！」

なにその自身・・・怖い・・・

## 二話三 平原と非日常（後書き）

友達に見せたら日常系のほうが面白いって言われた・・・  
それでもっ！俺はファンタジーが好きなんだ！

## 四話四 脳身はひじめでも脳身

from・馬車の上・昼

俺達はこれから行く当ても無いのでフォルさんやダリルに誘われてフレイヤ学園の受験を受ける事にした、フレイヤ学園は各種族から100名づつ取るので人間の受験者が増えても自分たちは変わらないし知り合いが増えるのは嬉しいらしい

隼人「ウォルさん、フレイヤ学園には後どれくらいで着くんでしょうか？」

ウォル「ん？ そうだね、今日の夜くらいには着くと思つよ

夜か・・・歩くよりはだいぶ早いんだろうけど、馬車って結構揺れるんだな、尻が限界なんだが・・・

フォル「あ、あの」

隼人「ん？ なんですか？」

フォルさんが遠慮気味に話かけてきた、ちなみにフォルさんは年下かと思ったのだが同じ年だった

フォル「コータさんはなんで私をずっと見ているんでしょうか？」

コータとは小椋の事だ浩太がコータに聞こえるらしい

隼人「そりゃフォルさんが綺麗だからじゃないですかね？」

小椋め・・・綺麗だからって凝視するのはどうなんだ・・・

フォル「え、ありがとうございます// でもなんだか、口ずさみながら見ているのですが・・・」

俺は後ろにいた小椋を見てみた、なぜか体育座りだ

小椋「ハアハアハア・・・エルフ耳が俺のパトスを熱くするヤバイヤバイ、あの耳をハミハミしたい・・・ハアハア」

・・・よく見るとフォルさんは震えていて、ダリルは小椋の荒い息に引いている・・・

脂身エ・・・ゆるぎねえな・・・

隼人「馬車からおろしますね?」

フォル「え!? 友達じゃないんですか?」

隼人「俺の友達に変態はいません・・・オルア!」

小椋を馬車から蹴り落とす、小椋は地面に転がり数秒ビクビクッとした後、起き上がり追いかけてきた

小椋「ちよつ、まつて俺何かした!? 幸せな世界に居たような気がするのに口の中が砂まみれなんだけど!」

隼人「お前つ、女人をつ、凝視するのつ、禁止だつキモいんだよ!」

乗り込んでこよつとする小椋を蹴り出す

小椋「違うつ、これつ、はつ、、愛だよ、はぶつ、」

フォルに向けてワインクする小椋、蹴られながらもパトスをとめねえのか・・・

隼人「そんなんだからお前顔はそこそこ良いのに彼女できねえんだよ!」

小椋は女子に人気はあるが基本的に学校では女子とあまり話さない(小椋直接話すとウザイから)だから女子とはメールでの会話が基本だった

小椋「違うつ!彼女ができるんじゃない!みんな俺が眩しそぎて遠慮してるだけなんだ!」

小椋が走りながら必死で否定している

隼人「ウォルさん、スピードあげてもうえませんか?」

小椋「NOOOO!…まつて!…すいません…もう凝視しませんからあああ」

隼人「フォルさん反省してるみたいだし許してあげてもうえませんか?」

フォル「え、あ、はい、大丈夫です、フフ

後ろを見てみると3人とも笑っていた

小棕「ふう・・・本当ににおいていかれるかと思った・・・」

ダリル「ダッハッハッハ、お前らマジで面白えな」

フォル「怪我とか大丈夫なんですか？馬車から蹴りだされた時、顔から落ちてましたけど」

隼人「そういうえば怪我してねえな」

小棕「怪我してないのを疑問に思つてゐるのに蹴りだすって、怪我させる気満々じゃん・・・」

from：馬車の上：夕方

小棕「お、なんかでかいのが見えてきたぞ！」

フォル「あらが、フレイヤ学園の城壁ですね」

隼人「想像よりだいぶでかいな毎年300人が入るつてことはここまで学生いなんじゃない？」

フォル「3ヶ国の中立時点なので商人とかが良く通るんです、だから3ヶ国の首都並みに大きい街ですね」

隼人「なるほど、そりやでかいはずだ・・・」

これを見ると本当に異世界なんだなあ・・・

小椋「それで…？受験はどこで受けられるんだ？」

フォル「あの一番大きい建物でやるそうですよ」

城ちゃん…

隼人「すごいな、受験って日にちとか決まってないんですか？」

フォル「受験はもう3日前から始まっています、そこから10日間の間であれば朝から夕方まで受ける事ができますね」

小椋「あれ、じゃあ今日は受けれない…？」

ダリル「そうだな、学園が手配してくれる受験者用の宿があるらしいからとりあえずそこで泊まることになるな」

隼人「宿まで手配されてるのか…」

ダリル「まあ1日しか泊まれねえけどな、受験おわつたら用無しだし」

隼人「え？合否の発表って受験日最後以降にわかるんじゃないのか？泊まれないとまずいな」

フォル「いえ、仮の合否はその場で出ますよ、仮合格した場合、別の旅館に案内されます」

隼人「ん？それだと早く受験したほうがいいんじゃないのか？人數決まってるし」

「明らかに合格な場合はそのまま学園内の部屋に案内してもらいますが、なかなかありませんね、100位以上の合格判定だと学園が手配している別の宿で待機になります、そして自分より高い判定の人が現れると繰下げられて100位以下に落ちると出て行つてもらうそうです」

隼人「何その合否判定・・・生殺しだろ・・・」

小椋「胃がちぎれるんじゃね？待ってる間」

「胃薬は必須だそうですよ」

「・・・」の学園コエエ・・・

## 五話目 心荒む宿

from・受験者専用宿前・夜

俺達はウォルさんに受験者専用の宿の前まで送つてもらい、お礼を言つてウォルさんと別れた

隼人「あ”～やつと着いた、尻が崩壊寸前だわ」

小椋「何つ！俺じゃないとしたら誰に掘られた！？ダリルか！」

隼人「てめつ、こんな人通りの多いとこで勘違いされるような発言してんじゃねえ！」

小椋「そんなん俺、心配してるのこつー」 グイツ 「アンツ

」

ダリル「誰が掘るだコルア！」

あ、ダリルがキレて小椋がアイアンクローラーされる

小椋「ア”ア”ア”ア”ーーーマジで痛いつ！でもっ、感じちやう」（ビクンビクン）

小椋は最後に氣色悪い発言をして氣絶した

ダリル「こいつ、初めは面白え奴だと思つてたんだが、だんだんウザくなつてくるな、発言と行動が逝つてやがる」

隼人「脂身だからな、初めはよく感じるんだが、食いすぎると、あとから気持ち悪くなるんだよ」

ダリル「脂身……たしかに言えてるな！」

ダリルと俺達は馬車の上で雑なしゃべり方が合ったのかかなり仲良くなつた小椋の扱いにまだ慣れてはないようだが、ちなみにダリルは狼の獣人らしい、他にも猫や鼠などもいるらしい

隼人「あれ、フォルさんは？」

ダリル「あそこいるぞ」

ダリルが指差すとフォルさんは気まずそうに視線を逸らした、とうか距離が遠い

隼人「完全に引かれてるな、このヴァカのせいだ」

フォルが気まずそうに近づいてきた

フォル「すみません、周りの視線に耐えられなくて」

隼人「あー、うん、仕方ないと思いますよ、この気持ち悪さだし」

ダリルの脇で抱えられて、ニヤケ顔で気絶している小椋を指差す

フォル「つう、そうですね、とりあえず宿に入りませんか？一人1つ個室をもらえるそのので」

隼人「一日とはいえ個室なのか」

学園パネエ・・・

from・受験者専用宿・一人用個室（個室）・内

隼人「あー、やつと一息ついた」

ちなみに気絶した小椋は借りた鍵と一緒に部屋に放り投げた・・床に

隼人「異世界か・・・」

俺だつて男だ夢と冒険にあふれる世界にこれたとしたら嬉しい、だが・・・

隼人「なぜ小椋となんだよ！」

色々な面で難易度が無駄に上がつてクソゲーと化してるじゃねえか！

? ? ? 「つづ、やめてくださいー近づかないで！」

廊下の方から女の人の悲鳴のよつた声が聞こえてきた

隼人「ナンパかなんか？まあ、俺には関係ないし、学園管理の宿なんだから誰かが止めるだろ」

知り合いでもないのに助けるなんてアホくさい・・・

? ? ? 「ハアハアハア・・・猫耳が俺のパトスを熱くするヤバイヤバイ、その耳をハミハミしたい・・・ハアハア」

・・・・・・・・・・チックショオオオオオーーーー

バンッ（扉を開ける音）

ダッダッダッダッ（廊下を走る音）

隼人「オルアーーーー！」

俺は、獣人の少女にすり足で近づく変態に己の全力を乗せたドロップキックを蹴りこんだ

小椋「アグアアアアアアーーーー！」

俺の全力を乗せたドロップキックは見事命中し変態を壁に叩きつけた

小椋「つく・・・わが生涯に一片の悔い無し・・ガフツ」

隼人「後悔の塊みてえなやつが悔い無えわけねえだろ」

猫耳娘「あ、あの、あの人大丈夫なんですか？すごい飛びましたけど」

話かけてきたのはさつきまで変態の脅威に晒されていた猫？の獣人の女の子だ、身長は俺の胸ほどまでくらいしかなく、銀色の髪をしている、獣人といつてもダリルのような獣が二足歩行になつたような獣人ではなく耳と尻尾以外は人間と変わらない、獣人の女はなぜか人間っぽい感じになつてているそうだ、具体的に言えば人魚と魚人的な違いだ

隼人「ああ、たぶん体は大丈夫だ、頭はダメだが」

猫耳娘「あ、あの人と、お知り合いなんですか？」

獣人の少女は不安げな瞳でそう聞いてきた、くつそーあいつと知り合いつてだけで、こんないたいけな少女に不信感を持たれてる、泣きそうだ！

隼人「あー、うん、不本意ながら知り合いなんだ、俺に免じて許してもらえないかな、あいつ馬鹿だけどアホなだけなんだ」

ダリル「ん？ おいハヤト、なんでコーダはそんなどいで気絶してんだ？ さっき部屋に放りこんだだろ」

ダリルが後ろから偶然歩いてきて俺に話しかけてきた、チャンスだ！ 同じ獣人ならこの不穏な空気を一掃してくれるかもしれん！

隼人「ああ！ 実はこの娘に小椋の奴がまたやらかそうとしたから蹴りで気絶させたんだよ」

ダリル「マジか、本気で気絶させたのに回復早えな・・・んでその子はどこにいるんだ？」

・・・ん？ 見渡してもさっきまでそこにいた獣人の娘はいなくなつていた

隼人「あれ？ さっきまでそこにいて話してたんだけどな・・・帰つたのか？」

ダリル「ふーん、まあとりあえずコーダを部屋にまた放り込むか

隼人「あ、ああ、次は部屋から出ないよう縛つておくか、また襲うかもしれん」

ダリル「そうだな」

そして俺達は小椋をベッドに縛り付けて自室に帰つていった

## 六話目 試験日 前半

from：受験者専用宿：一人用個室（自室）：朝

カラーン カラーン カラーン

鐘の音・・・?

隼人「んう・・・？朝か」

カラーン カラーン カラーン

隼人「鐘、鳴らしすぎだろ、うるせえし・・・」

鐘が鳴り止んだ瞬間から宿内に人が慌しく動き出したような気配が  
しだしたな

隼人「朝を知らせる鐘かなんかだったのか？」

ガチャツ（扉を開ける音）

小椋「オッス、オラ小椋、今日もいってみよー！」

なん・・・だと！？

隼人「お前、ロープはどうした？ベットに縛り付けたはずだが・

・

ガチャリ（扉を閉める音）

小椋「…………ツフ」（ニヤニ）

ツイラ（怒）

コンツコンツ（扉をノックする音）

ダリル「おい、ハヤト起きる、朝飯食つて試験に行くぞ」

ガチャ（扉を開ける音）

ダリル「ん？」一タも起きてたのか、ハヤトが縛り解いてやつたのか？」「

隼人「いや、こいつ自分で解いてきたみたいだぞ」

ダリル「は？あれを一人でか？」「

ダリルは小椋の方を見た

小椋「…………ツフ」（ニヤニ）

（（イラツ（怒）））

ダリル「朝から不快にさせる奴だ」ゴキゴキ（手を鳴らす音）

隼人「ああ、」ブンツブンツ（腕を回す音）

小椋「ちよつ、まつて、冗談だつて！」

隼人「ああ、存在が冗談なのは分かつてゐる」

小椋「存在が冗談！？え、ちょっとまって！もう気絶はイヤだ！」

俺とダリルは小椋に寄つて行く

隼人「大丈夫だ、試験があるからなギリギリ気絶はさせないでやる」

ダリル「ああ、」

小椋「いやつ！寄らないでっ！」

from:受験者専用宿:食堂

隼人 朝からすげー疲れたんだけど（主に精神が）

ダリル 奇遇だな、俺も昨日からすげー疲れてる（主に精神が）

小林一入とも体力ねぎなむ  
朝餉食にて体力もとそ云由

L

ダリル「コータは獣人の血でも混ざってんのか？回復力が人間じ  
やねえ」

隼人「お前、ついに人間止めたのか？」

小椋「最近隼人俺に冷たくない！？俺は純度100%で人間だ

！」

隼人「お前に優しくしたことなんてないだろ・・・」

ダリル「そうか？」「一タと昔から友達なんだろ？奇跡的なほど優しいじゃねえか」

隼人「おお！」

もつともだ！

小椋「おおーじゃないよつ、まつたく、そんなことより早く飯食つて試験に行こうぜー！」

隼人「そうだな、腹減つたし、そついえばフォルさんは？」

ダリル「ああ、同郷の知り合いがいたらしくてな、その友達と試験受けにいくらしいぞ」

小椋「そ、そんな！き・・・貴重なエルフ耳要素がつ・・・エルフ耳・・・ハアハア」

隼人「それ以上変態を加速させるなら締め上げるからな」

小椋「ツハ！？う・・・うう・・・エルフ耳があ・・・（泣）。

「」

ダリル「おらつ、泣いてねえでさつと食べるぞ」

隼人「ほつとけ、アホにかまつてられん・・・」

隼人「でかすぎじゃね？3年生までしかねえのに、ここまで土地と建物で力くする意味あんのか？」

ダリル「まあ訓練場とかあるしな、魔法実習場とかは特に広くねえとあぶねえし、あと建物がでかいのは寮も中に入ってるからだな」

隼人「つか、あそこに見えるのはアリーナか？」

ダリル「ああ、そうだな生徒同士の決闘や闘技大会で使われててらしいぞ」

隼人「3ヶ国を中心点だからって学校内にアリーナはやりすぎだろ・・」

ダリル「まあフレイヤ学園はこの都市の象徴だからなあ別の場所に作る意味も無ねえし」

隼人「なるほどなあ」

ダリル「お、あそこが受付みたいだぞ、行くか

隼人「む、ちょっとまつてくれ」

ダリル「ん？どうした？」

隼人「小椋はどこいった？」

ダリル「…………」

隼人「…………」

あいつは……また勝手な行動を……

ダリル「どうする……」

隼人「頭が痛い……大丈夫だ探す方法はある、耳をすませば自然と分かる」

ダリル「ん？どういふことだ？」

？？？「いやーー！気持ち悪いーー近づかないでーー！」

ダリル「…………そういふ」とか……

隼人「いくか」

ダリル「ああ……」

俺たちは女の人の悲鳴が聞こえた方向へ走り出した、変態を止めるために

## 六話四回 試験日 後半

from・フレイヤ学園・試験受付

受付「では、試験にお受けになる方は三名様でよろしいでしょ  
うか?」

小椋「んー…うむー…!」

ダリル「ああ、三人でたのむ」

俺とダリルは無事少女の救出＆変態の捕縛に成功し猿轡 + 簗巻きにして小椋（変態）を受付までダリルが肩に担いできた（これ以上暴走しないように）しかもなぜか縛られて恍惚気味だ

小椋「んふー…んふんー…!」

受付「では、試験は3名様一緒に受けていただきますので、この番号札をお持ちになつて15番の部屋に入つてお待ちお願ひします、」

隼人「はい、ありがとうございます」

受付さんから15番と書かれた番号札を受け取り歩き出す

from・フレイヤ学園・廊下

隼人「なあ、あの受付さん、小椋の状態を見ても何も反応しな  
かつたぞ」

ダリル「ああ、あれは猛者だな」

隼人「この学園……あなたれん……」

小椋「お、15番の部屋つてここじやね?」

ダリル「うお!何時の間に拘束解きやがった」

小椋「…………ツフ」（ニヤニ）

ドサツ！

あ、ダリルの肩から小椋が叩き落された

小椋「あぐふつ！石床に落とされるのは痛いっ」

隼人「つか、試験部屋20部屋もあるのかよ」

ダリル「まあ、それくらいねえと捌ききれないんだろ?水晶に手をかざすだけの試験つつても試験説明とかもあるだろうしな」

隼人「ふむ、まあいいやに入るぞ」

ガチャ（扉を開ける音）

from・フレイヤ学園・15番試験部屋・内

バタンッ（扉が閉まる音）

隼人「おーあれが試験用の水晶か」

部屋の入って見えてきたのは部屋の一一番奥に直径1mくらいの大きい透明の水晶玉だ

小椋「おおーーでかいな！」

ダリル「あの椅子に座つて待つてりやいいのか？」

隼人「そうじやね？待つてたら試験の先生が来るんじゃないかな？」

小椋「イスがフツカフカだずえーー！」

隼人「イスの上で跳ねるなーうつとうじいつ」

ダリル「お前ら、全然緊張してねえのな・・・・・」

小椋「緊張？ナにそれ美味しいの？」

隼人「小椋に緊張なんて感情あるわけねえだろ」

ダリル「・・・・・ハヤトはどうなんだ？」

隼人「俺は小椋で慣らされてるからな、俺が緊張を切らした時が小椋が奇行に走る時だから」

ダリル「緊張しないのは羨ましいが、その慣れ方は嫌だな」

隼人「ダリルは緊張してるのか？・・・・・おいつ小椋！珍し

いものが多いからって部屋の物いじるな！」

小椋「チエツ、ちょっとくらい、いいじゃん」ボスンツ（イスに座る音）

ダリル「お前ら見ると緊張するのがアホくさくなってきたわ

隼人「よかつたじゃん」

それからしばし待つこと数分

ガチャツ（扉が開く音）

バターン（扉が閉まる音）

試験官「ここにちは、私はこの学園の魔法課教師のセリム＝フォールです、あなた達の試験官をつとめさせて頂きます」

入ってきた試験官は小人種族だろうかエルフよりも小さめの尖った耳に青い髪をした少女だ・・・大丈夫なのか？

セリム「ちなみに私の歳はあなたたちのよりもかなり上なので心配は無用です」

心を読まれた！

小椋「すげえ！心を読まれた！」

セリム「心を読んだのではありません、小人族は小さく長寿なのでこういう勘違いはよくあるんです、慣れているのであなたたちの

顔を見れば分かります

隼人「ああ」 そういうことか・・・

セリム「では、試験の説明をします。この水晶玉に手を当ててい  
ただくと潜在能力「体力・筋力・精神力・知力・魔力・敏捷度・器  
用度」を計りF～SSの段階で水晶内に表示されます。一般平均は  
Dランクで、す、このランクがDから高ければ高いほど評価点は上  
がります。潜在能力と共にギフトの表示もされますので、それも評  
価に加えさせていただきます。評価終了後に水晶が今まで受験した  
方かたと比較し順位が表示されます、1～10位の場合そのまま合  
格となりますですがそれ以下の場合、つまり11位～100位の方には  
別に宿を用意されていますのでそこで自分より高い人があらわれ1  
00位以下に落ちなかつた場合合格となります。ちなみにこの場で  
100位以下、もしくは自分より高い順位が出て繰り下げで100  
位以下になつた場合は不合格となりますのでよろしくお願いします。

「

フォルさんが言つてた通り、えげつない試験内容だなあ

セリム「何か質問はありませんか？」

隼人「はい、潜在能力の知力や体力はなんとなく分かるんですが  
精神力は何に影響するんでしょうか？」

セリム「精神力は鍊金術で魔力を入れる際や魔法を行使する際な  
どの魔力操作に影響してきますね魔力の器用度だと思つてくれれば  
大丈夫です。他に質問はありませんか？」

集中力みたいなもんか・・・

小椋「はい！先生は、彼氏います・・・」

隼人「だまらねえと玉潰す」（小声）

小椋「・・・なんでもありません」

セリム「・・・では質問も無いようなのでダリル＝コータさんから水晶に手をかざしてください」

ダリル「お、おうつ！」

あ、ダリル緊張してる

ダリルが手をかざしてセリム先生が呪文みたいなのを唱えると水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になった

名前　　：ダリル＝コータ

種族　　：獣人（狼）

潜在能力

体力　　：A

筋力　　：S+

知力　　：D

魔力　　：F

精神力 : C

敏捷度 : A +

器用度 : C

ギフト1：筋力増加（大）

順位：18位

小椋「うおっダリルすげえ！知力と魔力以外全部平均以上かよ」

隼人「このステータスで18位なのか？上にどんなのいるんだよ」

セリム「種族別の順位ですしね、獣人族は身体的なステータスは高いのです。狼の獣人は敏捷度と体力が高く筋力が弱めなのですがギフトの筋力増加にくわえ効果の値が（大）なので弱点を補つて良い結果になつてますね」

隼人「今日もう5日目だしこれは受かつたんじゃね？ダリル」

セリム「そうですね、今の時点で20位ならば受かる確立はかなり高いです、日がたつごとに受けける人も減りますし、高ランクの方は早めに受験してますから」

小椋「ダリルおめでとー（ノ^ ^）ノ」

ダリル「お、 おお！ ありがとうよー。」

小椋「あ、 ダリル半泣き」

隼人「茶化すなや」

今はそつとしといてやれよ・・・

セリム「では、 次はコータオグラさん手をかざしてください」

小椋「いくぜー！」

小椋が手をかざしてセリム先生が呪文みたいなのを唱えるとさつきと同じように水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になった

名前　　：コウタ＝オグラ

種族　　：人間

潜在能力

体力　　：B

筋力　　：C +

知力　　：F -

魔力　：D+

精神力　：C

敏捷度　：B

器用度　：D

ギフト1：超回復

ギフト2：魔力感知

ギフト3：状態異常無効

順位：合格

突つ込みどころ満載すぎだろ・・・

隼人「順位が合格になつてんだけど」

セリム「おめでとうございます、1位～10位の方は順位の上下が付けにくいらしく順位はでてきませんが合格となります」

小椋「俺の時代キター————！」

隼人「おいおい・・・知力F・の馬鹿がトップクラスにいていいのかよ・・・」

セリム「おそらくギフトの数でしょうね、希少なギフトが3つも

ありますし・・・特に魔力探知は魅力的ですね、国家から引っ張りだこになるかと」

もはやダリルは口を開けたまま放心してゐる

隼人「そうなんですか?」

セリム「魔力感知ができるということは魔力でできたトラップや魔力のこもった鉱石や草など貴重なものの発見・発掘も容易になりますから」

小椋「ひやつほー！」

隼人「しかも超回復と状態異常無効つて・・・良い肉壁になるな」

セリム「では、次はハヤト＝イチハラさん手をかざしてください」

小椋「お前ならできる！元気があればーなんでもできるー！」

隼人「あーはいはい、がんばりますー」

どうがんばるのかはしらんが

俺が手をかざすとセリム先生が呪文みたいのを唱えた二人同じようく水晶の中に光の粒子のような物が出てきて文字になつた

種族 : 人間

潜在能力

体力 : C -

筋力 : D

知力 : B

魔力 : S

精神力 : SS

敏捷度 : C

器用度 : A

ギフト1 : 魔力増加(大)

ギフト2 : 異空間収納

ギフト3 : 武器重量感無効

順位 : 合格

小椋「おっしゃー！流石ブラザー！」

隼人「武器重量感無効と異空間収納つてなんだ」

セリム「す、すごいですね2連続で合格がでたのは初めてです、異空間収納は自分が触れている自分が持てる重量までの物を念じて出し入れできるギフトのようです、かなり珍しいですね・・・今現在そのギフトを持っている人はあなた意外確認されていないようですが、武器重量感無効は持っている武器を重量0の感覚で武器を振れるスキルですね、しかし、武器自体の重量はそのままなので威力は落ちません」

隼人「おーそれは便利だわ、ラッキー 部屋で試してみるか」

小椋「いいなあそれ、俺にも見せてくれ」

セリム「では、お一人は合格いたしましたので、このままお住まいになる寮へ案内させていただきます、その後ダリルさんを仮合格者用の宿へ送らせていただきますので、この部屋でしばしお待ちください」

見てみるとダリルはまだ放心していた

小椋「おーいダリル?」

ダリル「あ、ああ、おめでとう」

隼人「ダリルも合格同然だし、そっちに遊びにいくわ、5日も部屋でいるの暇だろ?俺も暇だし」

小椋「あそぼうゾエ」

ダリル「なんか、お前らの見方変わったわ・・・」

そつして俺たちの試験はほぼ全員合格で終わった

## 八話目 脜身の明日はひつちだ

from・フレイヤ学園・廊下

俺たちは試験が終わった後、試験官だったセリム先生にこれから住むことになる部屋へ送つてもらつてゐる

隼人「広いな・・・不便じゃないのか?」この広さ、扉も多いし

何ここ宮殿?

セリム「すぐに慣れますよ」

俺たち二人の前を進んでいるセリム先生が答える・・・慣れるのか?

小椋「なあ隼人」(小声)

隼人「ん?」

小椋「これだけ扉があるんだ、間違つて開けて女子更衣室だとしても怒られないよね?」(小声)

脂身エ・・・

隼人「やめとけ・・・」ここでそんな事やつてみろ、土下座じやすまんぞ、普通に魔法でミンチにされるかもしれん

ここは前に居た世界と違つて魔法があるんだ個人の戦闘力が半端じゃないだろ

小椋「ツハ！ 魔法だよ魔法！」

隼人「魔法がどうしたよ？」

小椋「透視の魔法とかあるんじゃね！？ それさえあればああ！」

（小声）

隼人「そんな都合の良い物あるかよ」

小椋「セリム先生！！俺、魔法をつ覚えたいです！」

「こういう時の向上心は半端じゃないな・・・つか話聞け

セリム「人族の方が魔法をですか？珍しいですね、人族の方は鍊金術課か戦士課に進む事がが多いのですが」

隼人「え、人族が魔法課つてそんなに珍しいんですか？」

セリム「人族の方は魔法を使える体ではないので、潜在魔力も大体の方は低めですし、使えるには使えるのですが体への負担が高いんです、ですので鍊金術でゴーレムを作つて魔力を流し込むなどして戦う人が多いですね、他にも身体能力を上げる薬や珍しい魔法具を作つたりする方もいます」

隼人「ちなみに体への負担つてどんな感じなんですか？」

セリム「低級魔法なら痛みを感じる程度ですが、上級魔法を使おうとすると死ぬ事はありませんが激痛が走り皮膚が裂けたりしますね」

怖ええええ！

隼人「俺はやめとくか・・・小椋と違つてマゾじやねえし

小椋「ちよつ、さすがの俺も自分で産む痛みには感じないからね！？」

否定する所が違つて、マゾを否定しろ・・・

隼人「でもお前たしかギフトで超回復があつただろ？それあればいけるんじやね？」

セリム「たしかヨーダさんは潜在魔力はD+でしたね、そうしますと魔法剣士課へ進むのがよろしいかもしません、D+の魔力では中級魔法まで覚えるのが精一杯でしょうし、魔法剣士課ならば補助魔法を自分に掛けつつ戦えますから重宝しますよ」

小椋「そ・・・そんな！俺には透視の魔法は使えないのかああ！」

こいつ暴露しやがった

隼人「いや、透視の魔法があるかどうかもわからねえからな？」

小椋「え、ないの？」

え、なんでこいつあるのが確定してる感じになつてんの？

セリム「透視の魔法というのがどういうものか私は知りません

が遠見の水という上級の鍊金術ならありますよ

隼人「それって名前の通り効果は遠くを見たりすることができるんですか？」

セリム「効果はたしか、一度行って見たことのある場所を何時でも水に映し出し見ることができる鍊金術だったと思います」

小棕「隼人！俺、鍊金術師になる！」

隼人「お前、ほんとわかりやすいのな」

セリム「ただ、鍊金術で作った物は上級な物ほど扱うのに高い魔法制御力と魔力が必要ですので遠見の水は上級者じゃないと発動できませんね」

隼人「お前馬鹿だしムリなんじゃね？」

小棕「そ、そんなん！俺つがんばるからっ！」

小棕がなぜか半泣きで俺にしがみつく、気持ち悪い・・・

セリム「ハヤトさんなら鍊金術課に入ればすぐに上級者になれるかもしれませんね、器用度もBと高かつたですし魔力はギフトの効果でSまであがつてました、魔法制御力が影響する精神力もSSなんてなかなかでませんよ？」

現実世界でプラモとか好きだつたせいか？器用度が高いのは

小棕「隼人様、下僕と呼んでください」

小椋が方膝ついてきた

隼人「考えが透けて見えるぞ」

自分が出来ないからって俺に発動させる気がこいつ

セリム「できれば魔法課に入つてほしいのですが…魔力の高い人族の方は珍しいですし」

隼人「痛いのはちょっと嫌です」

激痛な上、皮膚が裂けるなんて嫌すぎる…

セリム「残念です…では、こちらがハヤトさんの部屋でその隣がコータさんの部屋になります、試験が終わるまでお待ちください、食事などは時間になりましたら係りの者が部屋に持つてきます、不在の場合はテーブルに置かせていただきますので、よろしくお願ひします。」

いつの間にか部屋についていたらしい、てか食事持つてくるの?食堂とかじゃないのか、もはや学生の身分じゃねえよ

隼人「あ、すいません仮合格者の宿ってどこにあるんでしょうか?」

これ聞いておかないとダリルのところに行けない

セリム「学園を正面の門から出たすぐ目の前の宿です」

近つ！もしかしてその宿も学園の物なのか？

隼人「ありがとうございます、これからよろしくお願ひします」

セリム「はい、よろしくお願ひします、では」

そういうてさつき俺達が来た道を帰つていった、ダリルを宿に送る  
んだつけ

隼人「とりあえず部屋に入るか、ダリルの所に行くのは明日  
でいいだろ？」

小椋「そうやね、んじゃ後でそつち行くわー」

隼人「はいはい」

ガチャ（扉を開ける音）

from：フレイヤ学園・自室

バタンッ（扉が閉まる音）

隼人「広え、なにこの広さ学生の部屋にこんな広さ必要なのか  
？」

入った部屋は中央に置6畳ほどのでかいテーブル、空の本棚、部屋  
の端には綺麗なベットがある部屋だ

隼人「何事も広く無いとダメとか校則でもあんの？30畳くら

「あるんですけど」

「掃除がめんどくせえよ・・・しかもなぜかこんなに広いのに風呂場が無い、トイレはあるのに」

隼人「この世界の生活水準がわからねえ・・・」

風呂は共同風呂か？

隼人「もしかして町の様子を見るにそんなに文化が進んでなかつたように見えなかつたから風呂ないのか？」

この世界はまさに中世ヨーロッパ風だ

隼人「まあ最悪水を沸かして体を拭けば良いか」

いや、鍊金術つて割と何でもアリそつだから体を綺麗に保つ物でも作るか？

隼人「俺のステータス的に鍊金術が一番よさげだしな」

あ、ステータスといえば

隼人「俺のギフトで異空間収納つてのがあつたな、何かで試すか」

テーブルの上にあつた空の小さめの花瓶を手に持つた

隼人「これでいいか、たしか触れているものを念じるだけで良いっていつてたな」

俺は消えろと念じてみた、するとツフツと何の予兆も無しに花瓶が消えた

隼人「うおっマジで消えたぞ！」

やばい小椋じゃないがテンション上がってきた！次は出て来いと念じてみると花瓶が出てきた、そうして何回か遊んないと

ガチャ！（扉を開ける音）

小椋「隼人ー！遊びにきたぞー！つて何やつてんの？花瓶なんて持つて」

小椋が部屋に入ってきた、ノックぐらいしろ・・

隼人「ああ、俺のギフトに異空間収納つてあつただろ？あれを試してた、見てろ」

俺は小椋が見ている花瓶を念じて消してみた

小椋「おおー！まじで消えた！いいなー俺もそういうギフトがほしいわ」

隼人「お前は超回復・魔力感知・状態異常無効だっけか？」

小椋「できれば、空飛べるのがほしかったわ」

隼人「あーそれはいいな」

小椋にしては夢がある事言つた

小椋「窓から覗きし放題だしな！」

なるほどな、小椋だしな・・夢の方向を間違つてゐるだろ

隼人「魔力感知つてあつたじやん？お前何か感じたりしねえの？ここ魔力出す物とかもあるだろうし何か感じるんじゃないのか？」

小椋「いや、それが何も感じないんだよねえ」

隼人「そうなのか？俺の異空間収納みたいに条件があるのかもな、これ触れてないと収納できねえし」

そつ言つて俺は花瓶を出し入れしてみた

小椋「そうかも、今度セリム先生に聞いてみるわ

あ、そういうば生物とかも収納できるのか？

隼人「・・・・小椋ちょっとこいつちきてみてくれ」

小椋「ん？何？」

小椋がこっちに近づいてきた

ガシツ

小椋の手を掴み「消えろ！」と強く念じてみた・・・しかし小椋は消えなかつた

隼人「ツチ！、生物は収納できないのか・・・」

小椋「ちょおおお！？？？なにそれ！いきなり人体実験！？せめて犬とかから試してよ！」

隼人「犬が可愛そだらうが、バラバラになつて出てきたらどうする」

小椋「ちよつ！俺、犬以下！？しかもバラバラつて！？そんな可能性があるかもしれないのになんで俺で試すの！？」

隼人「あー、うるせえな、別に良いじやんバラバラにならなかつたんだから」

小椋「よくない・・・よくないよおおおおー！」

ガチャツ！（扉を開ける音）

バタンッ（扉が閉まる音）

小椋は結構シヨツクだつたのか泣きながら俺の部屋から出て行つた、まあアホだから明日には忘れてるだらう

## 八話目 脇身の明日まじっただ（後書き）

毎日投稿しようとしてたのですが今回遅れました><  
昔絵を描いてた経験があつたから挿絵でも描こうかな?  
と思つたら腕が鈍りすぎて断念しました・・・

漫画形式の絵が描きたかったの!  
というか漫画が描きたかったの!

## 九話目 衝撃の痛み

from・フレイヤ学園・自室・朝

カラーン カラーン カラーン

鐘の音・・・

隼人「朝か、」

カラーン カラーン カラーン

鐘の音は建物の中から聞こえる

隼人「学園の鐘だつたのか」

そういうえば昨日、部屋を貰つた後、小椋と話してたらなぜか泣きながら小椋は出て行つて、その後も小椋は部屋に来なかつたな、届けられた飯が美味しかつたから忘れてた・・・

隼人「しゃあねえ、小椋起こしてダリルの所に行くか」

from・フレイヤ学園・小椋の部屋・前

ガチャ（扉を開ける音）

隼人「小椋起きろ！ダリルの所に行くぞ」

返事が無い、居ないのか・・・

隼人「朝っぱらからどこに行きやがった、またあいつの中の変態が暴走したのか？」

探すか・・・

from・フレイヤ学園・受付

隼人「あの、すいません」

受付「はい、なんでしょうか」

隼人「気持ち悪くて身長が俺よりも高めの気持ち悪い人族を見かけませんでしたか？」

大事だから2回言いました

受付「お探しの方のお名前はなんといいますか？」

隼人「オグラ＝コウタです」

この受付さんも固定の笑顔保つたままで話続けてくるよ、怖えーよー！

受付「試験合格者のオグラ様は学園外へ外出中のようにです」

隼人「え、わかるんですか？」

この学園の受付は何、神？

受付「合格者の方はすでに学園に生徒として登録されていますので、こちらの水晶に情報が入っています。学園内のどちらの区域にいるかもわかるようになつております。」

便利だな、常に小椋警戒してくれねえかな・・・

隼人「学園外の位置はわかりませんか?」

受付「残念ながら学園内での位置までしかわかりません」

まあどうせダリルのとこだろ

隼人「そうですか、ありがとうございました、心当たりがあるので行つてみます」

受付「はい、行つてらっしゃいませ」

from・仮合格者専用宿前・朝

学園正面にある壁で囲われてる宿に入ろうとしたところで、ふと気づいた

隼人「あ、やばい俺ダリルの部屋どこかわからねえ・・・」

ガツ カランツ

ガツ カランツ

ガツ カランツ

ダリル「おい、もうへばったのかよ」

小椋「“めんなさい”！なめてましたあー斧って結構重かつたんですう！」

ダリル「文句言つてねえでさつさと割れ、俺は手伝わねえからな」  
聞き覚えのある声がしたので敷地に入つて庭に入るとなぜか小椋が薪割りしていた・・・なぜ？

隼人「何やつてんだお前ら？」

小椋「ああん！ハヤトオー！だずげでえ！」

小椋が走りよつてきて泣きながらしがみついてきた・・・気持ち悪い

隼人「意味わからんねえし、なんで薪割りなんてやつてんだ？」

ダリル「自業自得だ」

小椋「ちがう！俺をバラバラにしようとした悪魔のせいなんだ！」

隼人「は？悪魔？」

ダリル「昨日ハヤトにバラバラにされそくなつたとかで、こつちに泣きついてきやがつたんだ」

隼人「俺かよ、お前あの後ダリルの所に行つてたのか、つかバラバラにしようとしたわけじゃねえよ、俺の異空間収納のギフトで

生物も収納できるか試しただけだろ？・・小椋で

小椋「だからなんでそこで俺ええ！？そのせいでの俺つ！薪割りしてるんだからね！？」

隼人「意味がわからねえ・・・ダリル説明してくれ

ダリル「ああ、こいつ、この宿に来たはいいが俺の部屋がわからなかつたらしくてな、宿の中を迷つてたらしいんだが、こいつ間違つて女の部屋に入りやがつたらしいんだよ」

故意じやねえの？

隼人「で？」

ダリル「ああ、それでその入つた部屋が着替え中の魔法課のセリム先生の部屋だつたんだよ」

隼人「ん？セリム先生はこっちで住んでんのか？」

ダリル「仮合格者の管理人らしくてな一時的にこっちで住んでるんだと、んで覗きの罰としての薪割りだな」

隼人「それがなんで、俺のせいなんだ？」

ダリル「知らん」

小椋「だれのせいでこの宿に来たか考えてみろお！だが一番興奮したか考えてみろお！ハアハア」

小椋が鼻血を出しながら講義してくる・・・

隼人「完全にお前の自業自得じやねえか、それにしても薪割りだけで済んだのか、結構器のでかい先生だな」

ダリル「いや、こいつ、セリム先生に興奮して襲い掛かつたらしくてな、魔法でズタボロにされたが超回復のギフトでかつてに治癒されただけだ」

隼人「襲い掛かったのかよ・・・」

小椋「あはん」

ダリル「もういいから、薪割りやがれ今日中におわらねえぞ」

小椋「ムリだつてえええ！」の量おかしいもの！..

小椋が指差したのは大盛りの丸太だ

隼人「先生の怒りがわかるな、殺しにかかる、がんばれ」

ダリル「ああ、まあ訓練だとでも思つてがんばれ」

小椋「手伝ってくれないのぉお！？ダリルなんて筋力Sだったよね！？こんな丸太なんて楽勝なんじやない！？」

ダリル「S+だ、それを言つならハヤトも武器の重量を感じないギフトつてのがなかつたか？」

隼人「ああ、そりいえばあつたな、なんでこいつの手伝いなん

てしなきやなんねえんだ、と言いたいとこだがギフトは試してみた  
いな」

小椋「隼人様あ！一生ついていきやす！」

隼人「一生ついてこられてたまるかつ！斧かせつ

小椋「へいっ！がんばつてくだせえ！」

小椋は薪割り用の斧を手渡してきた・・・軽つ！

俺「本当に重量感じないんだな、スゲー振りませる」

俺は片手で軽く振り回してみる

ダリル「細身の隼人が片手で軽々振りましても妙な光景だな」

小椋「すげー」

隼人「んじじゃ薪割つてみるわ」

小椋「準備おーけー」

隼人「いくぞ」

俺は斧を思いつきり頭上に振りかぶつて丸太にたたき付けた

ガツ！ カランッ

小椋「うおつ割る薪の下の木までおもいつきり斧が刺さってる！」

す  
げ  
え  
！

ダリル「重を感じてねえから振り下ろすスピードが尋常じゃねえな、良いギフトじゃねえか」

隼人「痛え・・・・・」

ダリル「ん？」

隼人「超つ痛てえ！んだけどつ！ふつざけんなつ武器の重さは感じなくとも武器から伝わる衝撃は思いつきり感じるのかよーー！」

尋常じやない速度で振り下ろしたためか衝撃が半端じやない

ダリル「ああ、衝撃は伝わるのか、それは予想外だな」

隼人「ああ、しかも軽いせいで力も何もいれてなかつたからモ  
ロに衝撃がきたわ」

小椋「で、でも加減すれば次もいけるんじやね！？」

隼人「無理、手がもう使えね、頑張れつてくれ」

指が動かねえし皮剥けたし

## 十話目 失恋

from：仮合格者専用宿・庭・昼

ガツ カラン

ガツ カラン

隼人「小椋のギフトは便利だな、ちょっと休むだけで体力まで回復するのかよ」

小椋は薪割りを休憩をはさみつつ数をこなしている

ダリル「さすがにレアなギフトだと効果が違うな」

隼人「あとは、状態異常無効と魔力感知か」

ダリル「良い盾だな、すぐに回復するし毒も効かねえし魔法も感知して防げるし」

隼人「まあ問題は本人が常に混乱状態つて所だがな」

ダリル「致命的だな・・・」

ガツ カラン

ガツ カラン

小椋「ハアハア、ちょっと一人とも手伝ってくれない？いくら体力

も回復するつていつてもこの数はムリい！」

隼人「俺は手が痛いからバス」

ダリル「お前はそいやつて薪割つてるほうが安全だし俺も手伝わねえ」

小椋「ちっくそおー！お前らの血は何色だあ！」

そういうて小椋はまだかなりの山になつている丸太を背に座り込んだ

小椋「あー、体が癒されるー」

ダリル「じつとしてるだけで回復つてギフトの効果つつてもすげえな」

隼人「俺のギフトは異空間収納以外は微妙だしなあ

小椋「ん？武器をあれだけ早く振り回せるなら加減すれば使えるんじゃないのん？」

隼人「命がかかつてる状態で加減ができるかよ」

ダリル「いえてるな、それに加減してスピード殺すと普通に振るのとかわらねえし、疲れ難いのがメリットなくらいだな」

隼人「魔力増加のギフトも魔法を人間が使うとヤバいらしいしなあ」

ダリル「宝の持ち腐れだな、鍊金術も魔力は使うがSクラスまで

魔力込めなきや 発動できないのは稀だしな

小椋「隼人！」

隼人「なんだよ」

小椋「俺が一生守つてやるからなつ」（キラツ）

隼人「キメエ！」

ブォンッ！ ガツ！！

余りにもキモすぎたのでとつさに薪割り用の斧を小椋にぶん投げた、斧は小椋の顔のすぐ横の背にしている丸太に突き刺さつた ッチ、はずれたか・・・

小椋「しゅううううーーーーーーーー顔ーー今隼人顔狙つた！頬にかすつた！」

隼人「ツチ、まあ落ち着け、即死じやなきや回復するだろ」

小椋「舌打ち！？ていうか頭は即死コースじゃん！！」

隼人「おちつけ、俺も悪氣があつたわけじやないんだ」

小椋「そ、 そうなのか？」

ダリル「いや、思いつきり殺氣が出てたぞ、ギフト効果のせいで重量感じてねえからか斧投げた時のスピードが半端じやなかつたな」

ツチ、ダリルめ余計なことを・・・

小椋「ヤツパリイイイ！？何！？最近隼人俺に殺意があるとか思えないんだけど！？」

隼人「小椋、そんわけないだろう？「最近」お前を殺したいと俺が思つてるって本気で思つてるのか？」

小椋「え、ツフ・・すまんそうだよな」

隼人「出会った頃から殺したいに決まってる」（キリツ）

小椋「デスヨネー！絶対そう言つとおもつたよチクショオオオ！！」

小椋が丸太を抱きしめて泣き出し、丸太に向かってブツブツ言いだした

ダリル「オラ！小椋、もう体力は回復しただろ？さつさと割れ今まで中に終わらせろ」

小椋「何この二人！鬼だよ！悪魔だよ！もう俺つ丸太と結婚するから！」

小椋が丸太を抱きしめながら泣き叫ぶ

隼人「お前、丸太と結婚つて・・・丸太が可愛そうだろ？が！無抵抗な奴と結婚とは最低な奴だ！」

小椋「丸太でもだめええ！？？？つう！丸太さん！俺幸せにす

るから！毎日樹液塗りたくるからあー！」

ダリル「さすがに哀れになつてくるな・・・」

隼人「ああ、可哀想な奴だ、もういいから割れ」

小棕「俺と丸太さんの仲を裂くことなんてできないんだからね！？」

ダリル「もういい、かせつ！」

小棕「あつ！」

ダリルが小棕の持つてる丸太を引ったくりそして

ガツ！ カランッ

斧で叩き割つた

小棕「まるたん――――――――文字通り裂かれたあああー！」

まるたん・・・？

## 十一話目 魔力

from：仮合格者専用宿・庭・夕方

ガツ カラン

ガツ カラン

小椋「ラストオーー！」

ガツ！ カラン

小椋「あわった・・・あわったよーー！ふたりともおーー！」

隼人「おお、おつかれさん今日中に本当におわらせたな、えらいぞ」

俺は小椋が割つてる間暇だったので丈夫そうな手ごろな木を選んでダリルにナイフを借りて彫刻して遊んでいた

小椋「本当に最後まで手伝ってくれないとはおもわなかつたよ、あれ？ダリルは？」

隼人「もうすぐ終わるだらつからつて料理運んで部屋で待つてるつてよ」

ちなみに学園側の飯分はこつちで今日だけ作つてもうえるように頼んだ

小椋「ダリル・・・ホレちゃう！」

隼人「割つた薪運ぶのは明日でいいだろ？」

小椋「そつか・・・運ぶのもあるんだ・・・つうつうづづ・・・

「

隼人「手伝わねえからな（キラツ）」

小椋「うう・・・最近隼人冷たい・・・」

隼人「まあまあ、今日頑張った褒美にこれをやろう」

俺は自分で彫刻して完成したフォルさんに似せた腰から上までの木像を手渡した

小椋「マジテ！？きやつほおおおー！エルフ耳だー！ってこれフォルさんじやね？」

隼人「暇だつたからなあ、男彫る氣にもならねえし、こここの動物もわからねえし」

小椋「ナイフでここまで作ったの！？すぐね！？」

隼人「ああ、ありえないくらい綺麗にスッパ削れたんだよ、たぶんダリルに借りたナイフのおかげだらうな」

小椋「ふーん？まあもう暗くなるしダリルの部屋に行こうつか

ガチャ

小棕「ダリルー！これいいだろ？隼人にもらっちゃったぜ」

小棕はノックのせずにダリルの部屋の扉を開けてハイテンションのままダリルに話かけた

ダリル「む？おい隼人、それコータにやるのか？」

隼人「ん？何かまずかつたか？」

小棕「ツハ！？ダリル！このフォルたんは渡さないからね！？」

小棕は取られると感じたのか警戒している

ダリル「ちげえ！ハヤトが熱心に彫つてるからてつきり本人に渡す物だと思ってたんだよ」

隼人「本人つてフォルさんにか？なんでだよ」

ダリル「なんでつてお前・・・普通、男が女の木造なんて彫つたら贈るもんだと思うだろ？が」

ああ・・・惚れてると勘違いされたのか

隼人「勘違いだ、暇だから遊んでただけだよ」

ダリル「遊んでたつて・・普通にこのままで売れるレベルだぞ  
これ」

ダリルがフォルさんに似た人形を指差しながら言つた

隼人「それは大げさじやないか？ダリルが貸してくれたナイフの切れ味が良かつたおかげだよ」

ダリル「む？それはハヤトが魔力をナイフに流して削つてたからだろう？」

隼人「は？魔力なんて使えねえぞ俺」

ダリル「な！無意識であれだけの魔力をナイフに流してたのか！」

？

隼人「魔力つてどうやつたら感じ取れるんだ？」

ダリル「ありえねえ・・・そうか、お前ら人族だったな、人族は目覚めさせないといけないんだつたか・・・」

隼人「人間扱いされてなかつたのか・・・魔力を感じるようになるには何が必要なのか？」

ダリル「人族でも生まれた時から魔力を感じる事が出来る奴もいるらしいが基本的には魔力を扱える奴に魔力を体に流しこんでもらつて感じ取るしかないんだよ」

隼人「へえ～ダリルはそうやつて感じ取れるようになつたのか

？」

ダリル「いや、基本的に魔力が感じ取れねえのは人族だけだ、人

族も魔力は流れてるんだか感覺でとらえられないみたいでな、だから他人の魔力を流し込んで「これが魔力なんだ」と感じ取る必要があるんだ」

隼人「ああ、だから小椋も魔力感知のギフトがあるのに感じ取れねえのか」

そう聞いて小椋のほうを向いてみる

小椋は人形に夢中で話を聞いていない・・・こいつ人形でもこうなるのか

隼人「……ということは俺や小椋も魔力を流し込んでもらえば感じれるようになるのか？」

俺は見なかつたことにして話を続けた

ダリル「ああ、ただ流し込んでもらう相手は先生にしてもらえ、下手なやつにやられると人間は魔力になれてねえから魔力を流し込まれすぎて激痛が走つたり、逆に弱すぎて感じ取れなかつたりするからな」

隼人「え、その流しこまれるのは痛いのか？」

ダリル「俺は人族じやねえからわからねえが、他人の魔力つづーのは自分のとは別物だからな、人それぞれに特色があるんだ、だから違う魔力を流し込まれると異物感があるしそれを押し返そうとするんだが、そのときに押し返してるのが自分の魔力だと感じ取れる

ようになるんだ」

隼人「なるほどなあ・・・ん?でもダリルが言つには俺は魔力を使ってたんだよな?」

ダリル「俺も削つてる所を見たが切れ味を増すような流しこみ方だつたからてつきり魔力を意図的に使つてるもんだとおもつてたわ」

隼人「無意識でも出るのか?」

ダリル「無意識というかたぶん集中力と魔力が隼人はでかいせいで漏れ出したんだろうな、普通に人間じやねえ魔力量だしありえないことじやない、魔力が高ければ人族じやなくとも感情が高ぶつたりすれば漏れ出すしな」

隼人「ふーん・・・てことは誰かに流しこんで貰えれば意図的に切れ味を増したりできるんだな?」

ダリル「まあな、ただ魔力消費が高いから実践じやまず使われないけどな、それなら循環させて体力と身体能力あげたほうが生存率も高えしな、鍊金術師には必要な技術だが」

隼人「む、ってことは俺の魔力は体を循環している状態なのか?」

ダリル「ああ、厳密にはしてないな。循環させるには感じ取つて体に纏わさないといけないだが・・・ハヤトは感じ取つてねえからでかい魔力を気づかず漏れ出して身体能力が上がつてるな・・たぶん」

ああ・・・ そうか平原で歩いてても小椋はギフトで回復があるから疲れなかつたのが理解できたが俺も疲れなかつたのはそのせいかな

隼人「明日にでもセリム先生に頼んでみようかな・・・ 魔法課つてことはできそうだし」

ダリル「そうだな、魔法課の講師ならできるだろう、朝方俺が小椋とお前にやつてもらえるように頼んでやるよ、二人とも合格してからやつてくれるだろ？ そ、時間もあんまりかからねえし」

隼人「それはうれしいが、小椋・・・ もか・・・？ こいつが裸を見た女人を前に暴走しないとは思えないんだが・・・」

俺は小椋を指差しながら不安気な声で言つてみた、ちなみに小椋はトリップ中

ダリル「・・・ 俺が押さえつける、どひらせよ明日は割つた薪をどこにやるのか聞きにいかなきやなんねえしな、あれだけの薪、あのままにするわけにいかねえだろ」

隼人「そうだな、それじゃあそれで頼む」

そうして飯を食べた後、小椋と一緒に自分の部屋に帰つていった

## 十一話目 魔力（後書き）

もっと状況がわかるように詳しく書いた方がいいんですかね？他の小説書いてる方々にくらべて状況の説明が少ない気がします

というか何時から学園に通えるんだろうか・・  
主人公の名称を「俺」「隼人」に移しました

from：仮合格者専用宿：ダリルの部屋：朝

今日は鐘が鳴る前にダリルの部屋前に来ていた

ガチャッ（扉を開ける後）

小棕「おはよー」「わいませ」（小声）

俺は小棕に付き合つて扉開け放しにしていつた部屋の外で待機している

・・・なんで寝起きドッキリ風？

小棕「グフフト・・今日もグッスリ眠つてらっしゃいますね」（小声）

ちなみに一昨日小棕はダリルの所に泊まっていてダリルは朝が弱いらしく鐘が鳴るまではなかなか起きなかつたそつだ

小棕「しつれーしまーっす」（小声）

ゴソゴソ（ダリルのベットに入る音）

なぜ俺まで朝早くから付き合つているかというと、この世界の人たちには夜更かしという概念がないのか暗くなつたら大体の人たちは就寝に付くようで、部屋を明るくしようと思つたらロウソクかランタンをつけておかなければいけない、しかし、ロウソクやランタン

を灯してまで読みたい本があるわけでもないので自然と早く寝てしまうわけで・・・夜更かしがデフォルトの現代高校生がそんなに早く寝ると予想外に早く起きてしまうわけで・・・暇なわけで・・・気づけば小椋に付き合っていた

小椋「あん、ダリルつたら獸臭いいん」（小声）

気持ち悪すぎる・・・

小椋「毛が、意外と硬くなくてモフモフする・・・暖かいよ・・・  
ダリル・・・」（小声）

もし同じ事されたらトラウマ物な光景だな、・・・

カラーン カラーン カラーン

そして朝を知らせる鐘が鳴り出した

カラーン カラーン カラーン

鐘が鳴り終わり、すこし時間が過ぎてからダリルは獸らしい大きな牙を見せながら欠伸をして体を起こしながら俺の方を向いた、小椋に気づかずに

ダリル「あ？なんだ、ハヤトもう来たのか？早えなまだ先生にまだ魔力の事頼んでねえぞ」

隼人「あ、ああ、ちょっと早く起きたんで自分で頼もつかと思つてな」

ダリル「そうか、コータはどうした？まだ寝てるのか？」

小椋「あら、ダリルつたら昨日はあんなに激しかったのに私の事忘れちゃったの？」

ダリルは小椋の声に反応して脇で横たわっている小椋に顔を向ける

ダリル「…・・・・・何をしてる」

小椋一 昨日のダリルは獸のようだつたわ（ツボ／／／）

小椋が頬を染めながらクネクネしている、しかも何時脱いだのか上半身裸だ

ブォンツツツ  
ズガン！！！！

ダリルは悲鳴のような咆哮をあげながら小椋を掴み振り上げてから壁に叩き付けた、死んだんじゃね？

小椋「・・・・・グ・・・グッハ！あら、ダリルつたら朝から激しいのね」

小椋は叩き付けられてから動かなくなつたかと思うと瞬時に回復して冗談を言つていた

ダリル「おい！ ハヤト！ 何してんだ！」

え、  
俺？

隼人「ん？なにが？」

ダリル「この馬鹿を止めるのはお前の仕事だろ？が！？」

隼人「ダリル・・・俺はダリルを男と見込んで頼みがあるんだ」

俺は真剣な目でダリルを見た

ダリル「あ？頼みだ？」

隼人「ああ、小椋をまかせたつ！」（ く ） b ッグ

ダリル「ふざけるな！なんでこんな野郎の面等をみなきやなんねえんだ！？お前の仕事だろ？が！」

隼人「え、だつてダリルってたぶん学園始まつたら戦士課に進むんだよね？」

ダリル「ああ、それがどうした？」

隼人「俺、鍊金術課行くつもりだし、たぶん小椋は戦士課だろ？」

ダリル「なつ！ふざけんな！」

隼人「ダリルはなんだかんだで優しいから小椋をほつとけないよな？ていうか、ほつといたらシャレにならんことになるし」

ダリル「お前も戦士課にくりやいいだろ？が！」

隼人「やだよ、小椋がいるし」

ダリル「おっ！お前の友達だらうが！」

隼人「まあまあ、ダリル落ち着け、小椋を今のうちに飼いなれば魔力感知のギフトがあるから得もするんじゃないのか？セリムさんも小椋のギフトは貴重だつて言つてたし」

ダリル「む、たしかに・・・探索では貴重な素材は手に入れやすいな・・・」

おおう、適当に誤魔化そつとおもつたら小椋のギフトはそんなに貴重なものなのか・・・

隼人「魔力感知するとそんなに得なのか？俺には小椋を引き取るのと同等だとは思えないんだが」

小椋「ハヤト酷い！！」

小椋はもう外傷も無く回復している

ダリル「もう回復したのか・・・魔力感知できるってのは素材の探索するなら喉から手が出るほどほしいギフトだ、普通に魔法で探索しても何かどの魔力を発しているかまではわからねえんだが魔力感知のギフトは識別して発掘することできるらしい」

隼人「それってすごいのか？」

ダリル「探索魔法なんでもかんでも感知しちまうから当てになら

ねえんだ、ほぼ弱い魔力を持つたゴミばかりだしな、しかし強い魔力を持つた鉱物や植物、武器、防具は貴重品だ高値で売れるし良い武器も作れる」「

隼人「ほおーよかつたな小椋、うまくギフトを使えば大金持ちじゃねえか」

小椋「お金よりも愛がほしい・・・」

小椋はいじけていた

from：仮合格者専用宿・庭・朝

朝から小椋の暴走にダリルがキレて咆哮しながら壁に叩きつけたのが宿で軽く騒ぎになつたらしく

セリム「一度ならず」一度までも・・・合格者でなければ追い出せるものを・・・ブルブル（怒）

騒ぎを聞きつけて魔法課教師のセリム先生部屋に入ってきた瞬間小椋が「俺の嫁！」とセリム先生に抱きつき押し倒し（上半身裸のままで）そりに騒ぎになつた

隼人「今からでも追い出せませんか？小椋を」

小椋「ちょ！？ち、違う、セリム先生を見た瞬間耐えられなくなつただけだ！」

隼人「いや、それがダメなんだろ、言い訳にもなつてねえよ」

セリム先生は小椋（上半身裸）に押し倒されたと思ったたら顔が真っ赤なりその瞬間、小椋を魔法で吹き飛ばしそのまま女の子らしい悲鳴をあげながら部屋が洗濯機になつたのかと思えるほど魔法で部屋の中を掻き回した

ダリル「なんで俺がこんなことしなけりゃなんねえんだ・・・」

セリム先生の魔法により部屋の中はめちゃくちゃ、そして部屋の中

にいたダリルもボロボロだ、そしてセリム先生に睨まれながら部屋の片付けをしている

隼人「それ、俺が一番言いたえから……何もしてねえのに…」

「

ちなみに俺は扉の近くに居たので危険を感じた瞬間慌てて脱出し部屋の外に出て避難できたので被害は無かつたが部屋が洗濯機になり、おさまった部屋の惨状を見て「逃げるか…」と思つた瞬間、半泣きのセリム先生と目が合い、その目を見て逃げられるわけもなく片付けを手伝わされている

小椋「でも魔法つてすごいな、天井に叩きつけられたと思ったら空中で泳いでたもん」

隼人「あれだけボロクソにされて回復してるお前がすげえよ、俺なら死んでるか重症だわ」

ダリル「というかあれは泳ぐなんて生易しいもんじゃなかつたぞ、俺は魔法の対象じゃなかつたから物がぶつかってきた程度で済んだがお前はキリモミ状に飛んでたぞ」

隼人「こいつ泳げねえから泳ぐって行動がわからねえんだよ、馬鹿だし」

ダリル「ああ、お前泳げねえのか、馬鹿が」

小椋「ちよつー？泳ぐのと馬鹿は関係ないよ！ひどくない！？」

隼人「馬鹿が！こんな片付けしてたら毒も吐きたくなるわ！な

んだこれ、テーブルか！？足が折れて斜めになつてんじゃねえか！」「

俺はもはや足が折れて粗大ゴミになつてしまつたテーブルを指差して叫んだ

セリム「壊れた家具は薪割りの場所に持つていってください小椋さんが薪にします」

小椋「また薪割りだよおおー？（泣）」

隼人「自業自得じゃねえか！…はあ、壊れた家具は俺のギフトで運ぶから一人は違う事やってくれ」

そういうつて俺は壊れて使えなさそつた家具をギフトで収納していくた

ダリル「マジで便利だな、そのギフト」

隼人「ああ、初めて便利な使い方ができる場がこんな所なせいで泣きそつだけどな、俺たぶん一生この片付けのこと覚えてるわ」

ダリル「心配するな、俺もだ」

小椋「俺はもう鮮明に覚えてるぞ…やわらかい感触と甘い匂いを…」

ズガソッ！！

小椋が発言した瞬間また小椋は魔法で壁に叩き付けられていて、顔を真つ赤にしたセリム先生が片手を突き出し荒い息を吐いていた

隼人「お前、仕事ふやすなよ・・・」

小椋「・・・・・ゲフツ・・・・・ハアハア」

小椋はなぜか壁に叩き付けられても幸せそうだ

セリム「つぐー・合格者でなければ・・・合格者でなければあ！クウウ！」

先生は悔しそうに地団駄を踏んでいる、といつか先生は試験の時に歳は俺達より上って言っていたが素は見た目どおりの少女なのか・・・

隼人「合格してるってそんなに取り消しにできないものなのかな・・・」

セリム「上位10名の合格者は水晶で合格の判定が出た時点で学園の生徒と登録されます、我がフレイヤ学園で上位合格した者が數日と経たず退学などということになれば学園の威厳にかかわります・・・せめて仮合格者なら！つぐ！」

ダリル「フレイヤ学園の敷居の高さが仇になつてゐるな、まさかこんな馬鹿が上位合格するとは・・・」

ダリルは小椋のほうを向いて不満そうな顔？だ（獣人なので今だに表情が掴めない）

小椋「何、その目・・・・なんだか燃えるじゃない！？ハアハア」

ダリルの視線に気づいて、何を勘違いしたのか暴走している、なんて頭が残念な奴なんだ・・・

隼人「はあ・・・あ、そうだセリム先生、先生って人に魔力を流して魔力を目覚めさせる? つてやつできませんか?」

セリム「できますが、どなたか魔力に目覚めてない方がいらっしゃるのですか?」

隼人「いや、目覚めてないのは僕と小椋として、できればやつてもいただきたいんですが、いいですか?」

セリム「・・・そりいえば人族だつたわね」（小声）

先生・・・素が漏れてる上に聞こえます

セリム「良いですよ、片付けが終わつたらやりましょう、少しの時間ですみますし」

隼人「ありがとうございます、おい、小椋! さつさと片付けたらお前の魔力感知が使えるようにしてもらえるぞ」

馬鹿は物で釣るべしと昔の偉い人は言いました（嘘）

小椋「え? 隼人魔力見えてないの? 僕もつみえてるんだけど」

・・・・・つは!?

隼人「え、お前いつのまに引き出してんの? ?」

「こいつは意味不明だが何時にも増して意味不明だ

小椋「…………まあ……？」

え？馬鹿なのこいつ馬鹿なの！？

隼人「ああ……馬鹿か……」

小椋「ちよつなんでいきなり罵倒！？会話のキャッチボールしようよ！」

いや、そのキャッチボールで初めに暴投したのお前からだから

セリム「たぶん小椋さんは私の魔法を受けて目覚めたのでしょうね……稀に攻撃魔法で目覚める方もいるので……」

なにそれ……稀に目覚める方法で何成功してんのこいつ？

隼人「相変わらず馬鹿なのに性能だけは良いな

小椋「あれ？おかしいよね、そこ関心するところなのになんて残念そうな顔なの？」

お前が馬鹿だからだ……

隼人「つてことはお前ギフトの魔力感知使えてんの？」

小椋「うむ！意識すれば誰がどこにいるかはわかるだう！」

ダリル「まじか……テタラメなギフトばっかもつてんなお前ら

二人

隼人「俺はまだマシだらう・・・」

セリム「お二人は自分のギフトの評価を上げたほうがいいですよ」

そうなのか?

ダリル「ああ、収納のギフトも見たらどんだけすぐえギフトかかるわ、荷物も持ち放題取り出し放題なんて商人や冒険者からしたら反則物だろ」

またしかにこれは便利だが・・・

隼人「ふーん? まあさつさと片付けようぜ、とりあえず俺は収納した家具を薪割り場に出していくわ」

ダリル「ああ、たのむ」

小椋「いってらっさーい」

ガチャツ (扉を開ける音)

from: 仮合格者専用宿・廊下・朝

バタン (扉を閉まる音)

フォル「あら? 隼人さん、おはようございます、仮合格なさつていたんですね」

ダリルの部屋から出て数歩、歩いたところでフォルさんに会った

## 三説二十九　とむじい（後書き）

お気に入りやレビューの数が増えるとトントンショーンあがつて頑張れる  
単純な作者なので応援してくださいこへへ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2456x/>

---

脂身と異世界にいるんだけど質問ある？

2011年11月17日21時32分発行